

## 職業奉仕の心がつなぐ友情

ロータリークラブに入会してから、「友情とは奉仕である」という言葉の意味を、私は少しずつ実感するようになった。入会当初の私は、職業奉仕という言葉にどこか堅苦しさを感じていた。それは、自分の仕事を通じて社会に貢献するという高い理念を掲げた、特別で難しい行為のように思えたからである。しかし、ロータリーで多くの仲間と出会い、交流を重ねる中で、その考えは大きく変わっていった。職業奉仕とは決して特別なことではなく、日常の仕事や人との関わりの中で自然に表れる「心の姿勢」そのものなのだと気づかされたのである。

ある時、私は仕事上の大きな判断を迫られ、強い迷いを感じていた。自分の決断一つで、多くの人に影響が及ぶ状況の中、責任の重さに足が止まってしまったのである。そんな私の様子を察した先輩ロータリアンが、決して押しつけがましくなく、自身の職業経験を交えながら静かに助言をくださった。「自分の利益を優先するのではなく、常に相手の立場に立って考えることが、結果として信頼につながる」。その言葉は、単なる成功談ではなく、長年にわたり職業奉仕を実践してきたからこそ生まれた、深い重みのある言葉であった。その一言は、迷っていた私の背中をそっと押し、進むべき道を示してくれた。

また、別のロータリアンは、自身の職業の専門分野を活かして、無償で地域の人々の相談に応じていた。誰に頼まれたわけでもなく、見返りを求めることもない。ただ「困っている人の力になりたい」という思いから、自然に行動している姿であった。その姿を目の当たりにし、私は奉仕とは声高に語るものではなく、日々の行動の中に静かに表れるものなのだと学んだ。相手のために思い、自らの持てる力を差し出す。その姿勢こそが、職業奉仕の原点なのだろう。

ロータリーの友情は、単なる親睦や人脈づくりではない。互いの職業を尊重し合い、困ったときには自然に手を差し伸べ、成功したときには心から喜び合える関係である。その根底には、「良い仕事を通じて社会に貢献したい」という共通の志がある。だからこそ、ロータリアン同士の友情は表面的な付き合いにとどまらず、深く、そして温かいものとなるのである。

奉仕の心とは、感謝と喜びを持ち続け、見返りを求めないことである。日本の哲学者の教えの中にも、「人は日々進化と向上を続け、前向きな言葉と自己肯定感を持ち続けることで、人生はより豊かになる」とある。健康も幸せも、すべては自分自身の心のあり方が決めるものだ。奉仕の心を持つことは、他者のためだけでなく、自らの人生をも豊かにしてくれるのである。

私は今、ロータリーで出会った多くの仲間たちの心遣いに、心から感謝している。そして、その感謝の気持ちを自らの職業を通じて実践していくことこそが、私にできる最大の奉仕であると考えられるようになった。職業奉仕の心を忘れず、友情を力に変え、これからも社会に信頼と希望を届けていきたい。